

二〇一八年度Aセメスター

ことばと文学Ⅱ（田口一郎准教授）まとめ

はじめに

本文書は、本来、制作者（Twitter: @angelic_UOT）が講義を聞き、教科書を読んで試験範囲の事項について一通り理解した上で、試験前にその内容を、ポイントをおさえて確認するために作成したものです。

したがって、事前に講義を聞いたり教科書を読んだりすることなく本文書だけを読んでも、内容について十分な理解は得られないばかりか、文人らの作品の中身も全てカットしているため淡白でつまらないものとなっております。予めご了承ください。

唐の文学

政治的に安定した事態の到来とともに、文学も大いに発展する。特に、詩は唐代において完成したと言える。一方、散文は六朝以来の駢文形式が長く続いたが、中唐期になると「古文」という文体や「伝奇」や「変文」といったジャンルが登場した。

詩の黄金時代

唐詞の発展に従った時代区分でもっとも一般的なものは、「初唐」「盛唐」「中唐」「晩唐」というものであり、これは唐の国家としての興亡盛衰とも強い関連を有する。それぞれの指示する時代は以下の通りである。

初唐…618年の開国後の約100年間。太宗の貞観年間や則天武后の治世が中心。

盛唐…8世紀前半から半ば過ぎまでの約50年間。玄宗の開元、天宝年間が中心。李白、杜甫の時代。

中唐…安史の乱から約50年間。代宗の大暦年間、徳宗の貞元年間、憲宗の元和年間が中心。文学は実力主義の時代へ。韓愈、白居易の時代。

晩唐…文宗の開成年間から唐滅亡（906）までの70年間。杜牧と李商隠の時代。

初唐の詩

初唐のはじめのうちは、南朝末期以降の技巧的、装飾的な詩風が優勢であり、宴席で勅命に応じて作られた儀礼的なもの（応制の詩）が多い。その代表的な詩人は、上官儀である。一方で、そのような中央文壇の姿勢に反発し、技巧を排した詩を著す王績のような詩人もいたものの、少数派であった。

四傑

そのような南朝の余習を脱するのは、7世紀末～8世紀初頭の則天武后の時代である。この時期の中心的詩人が、「初唐四傑」と称される王勃・楊炯・盧照鄰・駱賓王である。前二者は五言律詩の形式の完成に尽力し、後二者は七言歌行と呼ばれる長編の七言詩に特色を発揮した。盧照鄰と駱賓王の七言歌行では、それぞれ「長安古意」と「帝京篇」が特に名高く、共に『唐詩選』に採られている。

四人の詩風は、いずれも技巧や装飾といった六朝末の痕跡を残しつつも、そこからなんとか抜け出そうという積極的な意欲と創意が見られ、新鮮である。

四傑と同時期の詩人には、**杜審言**、**沈佺期**、**宋之問**がいる。後二者は、律詩の提携を完成させるのに力があつた。

陳子昂

四傑よりやや遅れて**陳子昂**という詩人が登場する。任侠の世界から学問へ転身し進士に及第した異色の経歴を持つ。彼は南朝風の詩に反発し、「復古」による詩の改革を提唱した。すなわち、南朝を跳び越え、漢魏の時代の「風骨」（たくましき）に満ちた格調を戻そうと呼びかけた。彼はその理想を「**感遇**」と名付ける38首の詩で実践した。そして、その意図は李白の「古風」59首に直接引き継がれるとともに、盛唐の詩は風骨に満ち溢れるものとなり、彼の理想が実現した。

盛唐の詩

盛唐は玄宗皇帝の治世とほぼ重なる。前半は政治が安定し、唐の文化の最盛期であつたが、後半は安祿山の乱を契機に、大きな変革期に突入する。この変化は文学にも色濃く反映されている。

詩は、近体詩（律詩、絶句）の形式が完成し、古体詩（古詩、樂府）に七言歌行が加わるなどの初唐期に整った基礎をもとに、多様な詩が作られた。

孟浩然

盛唐の詩人の中で最も先輩格に当たるのが**孟浩然**。不遇な人生。

王維

孟浩然以上に高い名声を得たのが**王維**である。杜甫、李白をしのぐ「一代の正宗」と称される。**人間の生活と結びついた親しみやすく絵画的な詩風**が特徴。

辺塞詩

版図の拡大による異民族との摩擦から辺境地帯への戦争に詩人を含む多くの兵力が繰り出されたことにより生まれた、**辺境地帯の特異な風土や自然をテーマとする「辺塞詩」**も、盛唐の詩が持つ多彩な魅力の一面である。臨場感に満ちた描写の**高適**や**岑参**、出征兵士の心情を描写した**王昌龄**は有名である。

李白

杜甫とともに盛唐時代の文学の双璧をなすのは、**李白**である。その人生は奔放、放浪そのものであつた。

彼の詩人としての目標は、**技巧に走らず古の線の太い詩風の確立**であつた。古風の復活は、陳子昂の主張を継ぐ、李白の詩歌改革のスローガンであつた。これは、奔放な彼の性格と併せて、形式的制約の多い律詩よりも古体詩を得意としていた理由であろう。

李白は、**古体詩とともに絶句とりわけ七言絶句を得意とした**。その詩はスピード感とリズム感、そして比喩にとりわけ優れているとされる。

杜甫

杜甫も李白と同じ放浪の人生であったが、それは李白のそれと性質を異にする。杜甫の場合、科挙に落第を重ね、また安祿山の乱以降の戦乱の中で生きるすべを探すための苦しい放浪であった。

彼の詩風はその**沈鬱な気韻に満ちている**が、ただ単に自らの身の上を嘆き悲しむものではなく、己の不幸を媒介に、**世の人々に不幸をもたらしている政治的社会的悪を激越に告発するものであった**。

彼の社会詩には、「三吏」「三別」など数多く存在し、自己の生きた時代の諸相を克明に綴る社会詩に対して「詩史」と称賛が与えられている。

同時に、彼は優れた観察眼と描写力を持ち、それを律詩の整った形式と結びつけて発展させた。

中唐の詩

安史の乱後の政治的混乱が収束し、安定した秩序が回復された時期が中唐である。

前半の大暦年間には、「**大暦十才子**」と呼ばれる詩人や、五言律詩に長じた**劉長卿**、社会詩を得意とする**元結**、自然詩に特色を発揮した**韋応物**などの詩人が登場した。しかし、彼らの作品に目新しいものはない。

中唐独自の詩風が誕生するのは、後半の元和年間である。そして、その頂点に立つのが**韓愈**と**白居易**である。

韓愈

韓愈は、比較的低い階層の出であったが、官吏は吏部侍郎（人事を司

る官庁の次官）にまで達した。これは、彼自身の能力に加え、安史の乱後の貴族階級の没落によるものである。

彼の詩は、しばしば「**險怪**」「**詰屈**」と評されるように、**奇怪でこごこつした難解な表現を用い、また、散文的で理屈っぽいところがある**。それは盛唐の詩とは新しいジャンルを創造するための工夫であった（盛唐と同じでは李白や杜甫に敵わないため）。こうした特質は、こと古体詩において多くの佳作を生んだ。

彼の周囲には多くの詩人が集まり、同人的なグループをなした。これは中東になって現れた新しい現象である。その中で名高いのは、**孟郊**と**賈島**である。宋の蘇東坡に「**郊寒島瘦**」と揶揄されたように、**苦吟をこととするくすんだ調子の詩風を特色とした**。

李賀

韓愈周辺の詩人の中で、最も異色な存在が**李賀**である。普遍的日常性を超越した幻想味豊かな詩想によって「**鬼才**」と称される。

白居易

白居易も韓愈同様、比較的低い階層の出であったが、刑部尚書（法務大臣）まで上り詰めた。韓愈と異なるのはその詩風である。彼の詩はつとめて平易な言葉によって書かれている。

彼の詩は彼自身によって4つの部類に分かたれている。すなわち、「新樂府」「秦中吟」を中心とする政治・社会批判の諷諭詩、私的な生活の折々に作られた閑適詩、「長恨歌」「琵琶行」を代表とするある事柄に鑑賞を発して作られた感傷詩、そして雑律である。

元稹、劉禹錫、柳宗元

元稹は、白居易の盟友で、「新樂府」運動の推進者であり、また平易な詩風を推進した。**劉禹錫**も白居易と親交があり、地方の民謡の形式を生かした「竹枝詞」が有名である。**柳宗元**は、韓愈に並ぶ散文の改革者として有名だが、詩人としても有名で、王維、孟浩然、韋応物とともに自然詩の四大家に数えられる。

晩唐の詩

晩唐の時代の政治は混迷を極め、すでに党という時代が終わりに向かうという重苦しい意識が詩人らにあった。その閉塞した空気の中で、独特の輝きを発するのが、この時代の詩である。その特に大きな存在が、**杜牧**と**李商隱**である。

杜牧

杜牧は七言絶句を得意とし、多くの人口に膾炙する名編を残した。彼の不遇な人生と相まって、**ペシミズムに覆われた詩風**が印象的である。

李商隱

李商隱は耽美派の詩人の典型であり、多くを恋愛詩が占める「無題詩」が代表的である。李賀に影響を受けたと思われるが、彼以上にデフォルメ化された詩境を示す。その恋愛詩は、外面的な恋愛の状況ではなく、内面的な恋愛の感情を描くものであり、自己の存在はほのかに暗示されるのみである。混乱する世の中庇護を求め、また無節操の非難を被った

彼には、杜甫や白居易と異なり、象徴の世界においてひそかに自己を語るしかできなかったのかもしれない。

詞

詞はもともと俗謡として歌われていたものだが、中唐の頃から、白居易や劉禹錫のような一流の詩人が取り上げるようになった。晩唐に入ると、この大家である**温庭筠**が熱心に創作意欲を示した。感傷的、耽美的詩風が風靡した晩唐の時代的雰囲気と詞の文学性がうまく調和している。

詞にはある一定の曲があり、それに合わせて作られるが、その曲ごとに音節数、句数、平仄、押韻のあり方が定まっており、近体詩よりも厳しく形式に規定されるとも言える。二段からなるものを「**双調**」、一段だけのものを「**單調**」という。

詞がさらに盛んになるのは、次の五代・北宋時代である。

散文の改革（上）

詩と異なり、散文は李白や杜甫らの時代にあってもなお、六朝時代からの駢文の文体を受け継いでいた。駢文の条件としては、①四字句と六字句を基本とする、②対句形式によって構成する、③平仄の配合によりリズムを整える、④典拠のある表現をつとめて用いる、の4点が挙げられる。こうした表現形式の整備に関心が注がれるあまり、内容の空疎さを引き起こしていたことは事実である。こうした反省もあり、中唐期に至って、**韓愈**や**柳宗元**により改革が行われることとなった。

韓愈、柳宗元

韓愈は、使い古された表現ではなく、自分自身の表現で、できるだけ自然な調子の文体を創出しようとした。そして、その文体の規範を戦国秦漢の時代に見出した。そのため、韓愈らの新しい散文を「古文」と呼ぶ。

もう一人の旗印、柳宗元は、未開の地に左遷され続ける不遇な人生を歩んだ。そんな中で、士大夫を中心に描く韓愈と異なり、彼は庶民の姿を描き出している。

彼らの「古文」運動は大きな反響を巻き起こしたものの、唐代においてはなお決定的な一つの潮流とはならなかった。

才子佳人の世界——伝奇小説

唐の小説は「伝奇」と呼ばれ、六朝の「志怪」の後継である。初期の伝奇は志怪の延長としての特徴を色濃く残すが、中唐の後半になり、形式の制約を受けずに細かい叙述を可能にする「古文」の文体が現れたことが作用し、作り物語としての意識がより高まってきた。

これとは別に、一般民衆を対象とする通俗的な説教である「変文」が行われた。

宋の文学

五代十国の時代には、詞が南方の小国で発達した。宋代に入ると、唐代と異なり、詩のみならず詞や散文も文学の主要な領域とみなされた。

詩について、唐詩が感情の文学と評されるのに対し、宋詩は理性の文学と評される。前者は、感情の激しい燃焼を最大の特徴とする一方で、後者は、熟慮され検討された言葉により、平静で知的な趣がある。

北宋の詩

宋初期の有力な詩人は、楊億ようおくをリーダーとする西崑派せいこんはであったが、李商隱にならうことを目標にしており、新しい詩風とは言えない。その動きに反発したのが、王禹偁おううしやうで、盛唐中唐の杜甫や白居易の詩風を目標にした。

宋独自の風格を備えた詩を産んだのは、二世紀前半、欧陽脩おうようしゆうと梅堯臣ばいぎょうしんである。

欧陽脩

欧陽脩は、梅堯臣らと結んで詩文の改革に挑んだ。彼の詩は、李白と韓愈の影響を受けたと言われるが、特に韓愈の古詩から多くを学んでいる。理屈っぽさや日常生活に密着した素材はとりわけ韓愈の趣を受け継いでいる。一方で、「陰怪」と称された奇怪さは姿を消し、自然でなだらかな格調を備える。

梅堯臣

梅堯臣ばいぎょうしんは、西崑派の虚飾をこととする詩風に対する反発から出発した。すなわち、技巧を廃し、つとめて「平淡」であることを旨とした。さらに、韓愈、白居易以上に日常の微細な出来事を好んで詩のテーマとした。このように、「前人の未だ道はざる所」を積極的にうたうことで、詩の題材を拡張した。

梅堯臣にとって、詩とは大きな感情の高揚をうたうのみならず、日常的な小さな感情の起伏こそ大切にしていた。この日常に潜む詩的真実を捉え

る態度は宋詩に特徴的な機知的な態度を先導した。

王安石

王安石は「新法」を推進した政治家として有名だが、詩人としても有名である。若い頃に地方官を歴任して下層の人々の生活にじかに接した経験からか、**為政者としての人民の生活に対する責任者が反映された詩が多い**。これは、「新法」に示される政治改革の発想として根をひとつに繋がるものである。詩が社会的視野を持つことを主張する彼は、**社会詩を多く著した杜甫に傾倒した**。

蘇軾

蘇軾は、宋詩人中の最高峰と目される。その詩は、**融通無礙な自由さと、おおらかな楽天性を特徴とする**。流謫されたときも、感傷を繰り返すのではなく、自らの不幸をより大きな次元から見下ろすことで乗り越えようとする姿勢を示す。また、**対象を正面からうたうよりも擬人法など知的なひねりが加えられていることも特色である**。

黄庭堅

黄庭堅で、宋詩の理知的傾向が極致に達する。屈折した知的処理を経たのちに、極度に凝縮されたイメージとなつて吐き出される詩風が印象的である。この理知的傾向をさらに促進するのは、詩は学問から生まれるという持論に基づく、典故の頻用である。彼を師と仰ぐ詩人たちは「**江西詩派**」と称される。

南宋の詩

南宋初期には、**江西派の詩人が大きな潮流をなしていたが、彼らの詩は北宋の延長に過ぎず、やがて衰退していった**。南宋の新しい詩的世界は13世紀後半に至つて出現する。それは、南宋三大家と称される**陸游**、**范成大**、**楊万里**の3人によつて切り開かれた。

陸游

陸游の作品には厳しい民族的状況の中にある憂国的心情を吐露する詩と日常生活の周辺を描く閑適の詩からなる。前者には、北中国の回復を求め続ける激越な情熱が見て取れ、北宋の詩の理知的な冷静さとは趣を異にする。後者は、梅堯臣以来の「平淡」を継ぎつつも、細やかな感覚を示し、新しい風格を示す。

范成大

范成大は、農村の詩が多い。重税に苦しむ農民たちを迫真的に描いている。

楊万里

楊万里は、はじめ江西派の詩人として出発したが、のちに王安石や晩唐諸家の風に学びつつ、俗語や俗語的発想を自在に駆使した、**機知に富む軽妙な風格を持つ「成斎体」**と称される独自の作風を確立した。

南宋三大家の没後は、「**四靈派**」「**江湖派**」が大きな勢力を持ち、**小市民的、日常的な味わいを持つ詩を多く創作したが、この平和はモンゴル軍**

の侵入により危殆に瀕することとなる。

詞の成熟

唐滅亡ののち、詞は、五代十国の中の前蜀および南唐に継承された。

前蜀では、宰相**韋莊**のもとで栄え、最古の詞の選集である『**花間集**』がこの国で編まれた。南唐では、皇帝**李煜**が優れた詞人として活躍した。

宋代には、詞は文学の一つのジャンルとして定着し、成熟する。本格的な開花を見せるのは二世紀前半である。

五代から宋にかけては「**小令**」と呼ばれる短い形式のものがほとんどだったが、**張先**、**柳永**の時代から「**慢詞**」と呼ばれる長編の形式が現れた。柳永はその第一人者である。

柳永

柳永の詞は広く大衆的人気を得て、名声をなした。内容は艶情のものと、旅行のものである。女性的な嫵媚たる気分を歌うのが、おおむねの詞の傾向である。

蘇軾

一方で、全く違った豪放な感覚を詞の世界に持ち込み別種の格調を作り出したのが**蘇軾**である。

蘇軾ののちの柳永の系統を継いだ「**婉約派**」により、詞の形式はひとまず完成した。

辛棄疾

辛棄疾は、南宋の主要な詞の作者である。彼の詞は蘇軾の後を受ける「**豪放派**」の風格を持つ。

散文の改革（下）

中唐の時期に、「古文」の文体が生まれたが、唐代においては十分に定着せず、さらには晩唐から五代を経て北宋初期に至るまで、古文は忘れ去られ、再び駢文が広く行われるようになった。

欧陽脩

欧陽脩は官吏とりわけ科挙の責任者となつて以来、**尹洙**や**蘇舜欽**らとともに散文の改革に乗り出し、古文を普遍的な文体として確立した。

彼の文章は自ら称するように韓愈に学ぶところが多いが、韓愈の奇怪さ難解さを伴う詩風とは異なり、論理的に委曲を尽くしつつ、極めて暢達した平易さを特徴とする。

蘇軾

蘇軾の文章は、韓愈や欧陽脩に学びながらも、さらにすぐれて自由闊達な趣を発揮する。

語録

宋は新しい儒学の生まれた時代でもあり、**朱熹**によって集大成された。彼らが弟子たちとの日常のふれあいの中で語った言葉は、「**語録**」という形で、弟子たちにより記録されている。